DIALOG(R) File 347: JAPIO

(c) 1999 JPO & JAPIO. All rts. reserv.

Image available 04926332

SEMICONDUCTOR DEVICE AND ITS PRODUCTION

PUB. NO.:

07-218932 [JP 7218932 A]

PUBLISHED:

August 18, 1995 (19950818)

INVENTOR(s): CHIYOU KOUYUU

KONUMA TOSHIMITSU

SUZUKI ATSUNORI

ONUMA HIDETO

YAMAGUCHI NAOAKI ...

SUZAWA HIDEOMI

UOJI HIDEKI

TAKEMURA YASUHIKO

APPLICANT(s): SEMICONDUCTOR ENERGY LAB CO LTD [470730] (A Japanese Company

or Corporation), JP (Japan)

APPL. NO.:

06-253082 [JP 94253082]

FILED:

September 19, 1994 (19940919)

INTL CLASS:

[6] G02F-001/136; H01L-029/786; H01L-021/336

JAPIO CLASS: 29.2 (PRECISION INSTRUMENTS -- Optical Equipment); 42.2

(ELECTRONICS -- Solid State Components)

JAPIO KEYWORD: RO02 (LASERS); RO04 (PLASMA); RO11 (LIQUID CRYSTALS); RO44

(CHEMISTRY -- Photosensitive Resins); R119 (CHEMISTRY -- Heat

Resistant Resins)

ABSTRACT

PURPOSE: To form high-resistance impurity regions (HRD) with thin-film transistors in source-drain regions in a self-matching manner.

CONSTITUTION: A first porous anodically oxidized film 107 is first grown on the side faces of gate electrodes 105 with a low voltage exclusive of a mask 106 atop the gate electrodes 105 and a gate insulating film 104 is etched with these electrodes as a mask. Thereafter, the state that the gate insulating film 104' exists in the regions near the gate electrodes 105 and does not exist in other regions distant from the gate electrode 105 is attained if this anodically oxidized film 107 is selectively etched. An impurity is substantially not doped in the lower part of the gate electrodes 105 and the doping quantity is decreased by the presence of the gate insulating film 104' even in the regions near the gate electrodes 105 and the high-resistance regions 111, 112 of the low impurity concentration are formed if impurity described in the self-matching inner as the mask of the gate electrode part in this state. The gate insulating film 104' does not exist in the regions distant from the gate electrodes 105 and, therefore, the doping is executed and the low-resistance regions 110, 113 of the high impurity concentration are formed.

DIALOG(R) File 352: DERWENT WPI

(c) 2000 Derwent Info Ltd. All rts. reserv.

WPI Acc No: 95-124873/199517

XRAM Acc No: C95-056848 XRPX Acc No: N95-098811

TFT on glass substrate - with improved definition of high resistivity

regions

Patent Assignee: SEMICONDUCTOR ENERGY LAB (SEME); HANDOTAI ENERGY

KENKYUSHO KK (SEME)

Inventor: KONUMA T; SUGAWARA A; UEHARA Y; OHNUMA H; SUZAWA H; SUZUKI A;

TAKEMURA Y; UOCHI H; YAMAGUCHI N; ZHANG H

Number of Countries: 007 Number of Patents: 011

Patent Family:

Week Patent No Kind Date Applicat No Kind Date Main IPC EP 645802 A2 19950329 EP 94306862 A 19940920 H01L-021/316 199517 B JP 7135213 A 19950523 JP 93284287 A 19931019 H01L-021/3205 199529 JP 7169974 A 19950704 JP 94253080 A 19940919 H01L-029/786 199535 JP 7169975 A 19950704 JP 94253081 A 19940919 H01L-029/786 199535 JP 7218932 A 19950818 JP 94253082 A 19940919 G02F-001/136 199542 TW 297142 A 19970201 TW 94108409 A 19940912 H01L-021/331 199720 CN 1109220 A 19950927 CN 94116346 A 19940920 H01L-029/78 199734 JP 9181329 A 19970711 JP 94253082 A 19940919 H01L-029/786 199738 N JP 96356830 A 19940919 JP 10041250 A 19980213 JP 93284287 A 19931019 H01L-021/283 199817 JP 97103537 A 19931019 JP 10065181 A 19980306 JP 94253080 A 19940919 HQ1L-029/786 199820 N JP 97102690 A 19940919 CN 1223465 A 19990721 CN 94116346 A 19940920 H01L-021/336 199947 CN 98108911 A 19940920

Priority Applications (No Type Date): JP 93284287 A 19931019; JP 93256563 A

19930920; JP 93256565 A 19930920; JP 93256567 A 19930920; JP 96356830 A

19940919; JP 97103537 A 19931019; JP 97102690 A 19940919

Patent Details:

Patent Kind Lan Pg Filing Notes Application Patent

EP 645802 A2 E 27

Designated States (Regional): DE FR GB NL

JP 7135213 A 7

JP 7169974 A 12

JP 7169975 A 12

JP	7218932	Α	12				
JP-	9181329	A	11	Div	ex	JP	94253082
JP	10041250	A	7	Div	ex	JP	93284287
JP	10065181	A	12	Div	ex	JP	94253080
CN	1223465	A		Div	ex	CN	94116346

Abstract (Basic): EP 645802 A

Forming a semiconductor device comprises (a) forming a gate electrode of anodisable material on a gate insulating film; (b) forming a first anodic oxide film by applying an electric current in a first electrolyte; (c) forming a second anodic oxide film between the gate electrode and the first oxide by a second current application in a second electrolyte. The first oxide is more porous than the second.

(II) Also claimed is the method as (I) formed on a semiconductor film sandwiched between two insulating films with impurity implanted into the semiconductor through a thinned portion of the first oxide using the gate electrode as a mask (III) thus area may also be coated with metal and converted to silicide. In another method, masks are also deposited. Also claimed is a TFT manufactured using the method.

USE - Insulated gate FETs on glass.

ADVANTAGE - High resistivity regions can be defined more accurately and lower temperature processing does not affect the glass substrate.

Title Terms: TFT; GLASS; SUBSTRATE; IMPROVE; DEFINE; HIGH; RESISTOR; REGION Derwent Class: E17; L03; M11; P81; U11; U12; U14

International Patent Class (Main): G02F-001/136; H01L-021/283; H01L-021/316; H01L-021/3205; H01L-021/331; H01L-021/336; H01L-029/78; H01L-029/786

International Patent Class (Additional): G02F-001/1333; H01L-021/3213

File Segment: CPI; EPI; EngPI

(19)日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11)特許出願公開番号

特開平7-218932

(43)公開日 平成7年(1995)8月18日

(51) Int.CL⁶

識別記号

FΙ

技術表示箇所

G02F

1/136

500

H01L 29/786

21/336

9056-4M

庁内整理番号

H01L 29/78

311 S

9056-4M

311 P

審査請求 有

請求項の数13 FD (全 12 頁)

最終官に続く

(21)出顯番号

特願平6-253082

(22)出願日

平成6年(1994)9月19日

(31) 優先権主張番号 特顯平5-256567

(32) 優先日

平5 (1993) 9月20日

(33)優先權主張国

日本(JP)

(71)出顕人 000153878

株式会社半導体エネルギー研究所

神奈川県厚木市長谷398番地

張 宏勇 (72)発明者

神奈川県厚木市長谷398番地 株式会社半

導体エネルギー研究所内

小沼 利光 (72)発明者

神奈川県厚木市長谷398番地 株式会社半

導体エネルギー研究所内

(72)発明者 鈴木 敦則

神奈川県厚木市長谷398番地 株式会社半

導体エネルギー研究所内

最終頁に続く

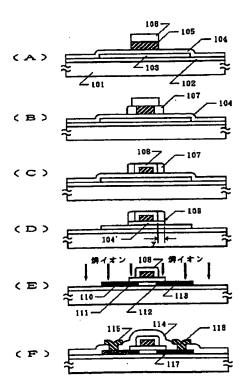
半導体装置およびその作製方法 (54) 【発明の名称】

(57)【要約】

(修正有)

薄膜トランジスタで、ソース/ドレイン領域 に高抵抗不純物領域(HRD)を自己整合的に形成す る。

【構成】 ゲイト電極上面にマスクを残し、先づ低い電 圧でポーラスな第1の陽極酸化膜107をゲイト電極の 側面に成長させ、これをマスクとしてゲイト絶縁膜をエ ッチングした後、この陽極酸化膜を選択的にエッチング すればゲイト電極の近くの領域ではゲイト絶縁膜が存在 し、遠い領域ではそれのない状態となる。この状態で、 ゲイト電極部をマスクとした、自己整合的な不純物ドー ピングをおこなうと、ゲイト電極の下部には実質的に不 純物はドーピングされず、ゲイト電極に近い領域でもゲ イト絶縁膜の存在によって、ドーピング量は少なく、不 純物濃度の低い髙抵抗領域となる。遠い領域では、ゲイ ト絶縁膜が存在しないのでドーピングがおこなわれて、 不純物濃度の高い低抵抗領域となる。



【特許請求の範囲】

【請求項1】 絶縁表面上に形成された薄膜トランジスタにおいて、

ゲイト電極と、

ゲイト電極の下に存在する真性または実質的に真性のチャネル形成領域と、

前記チャネル形成領域に隣接した1対の高抵抗不純物領 域と、

前記低濃度領域の外側に設けられた1対の低抵抗不純物 領域とを有し、かつ、

前記高抵抗不純物領域はゲイト絶縁膜下に設けられ、かつ、ゲイト絶縁膜の端部は前記低抵抗不純物領域と高抵抗不純物領域との境界またはその近傍に存在することを 特徴とする半導体装置。

【請求項2】 請求項1において、該低抵抗不純物領域は、実質的にシリサイドによって構成されていることを特徴とする半導体装置。

【請求項3】 請求項1において、該ゲイト電極の側面 および上面には該ゲイト電極を酸化して得られた酸化物 層が形成されていることを特徴とする半導体装置。

【請求項4】 絶縁表面上に形成された薄膜トランジスタにおいて、

ゲイト電極と、

ゲイト電極の下に存在する実質的に真性のチャネル形成 領域と.

前記チャネル形成領域に隣接した高抵抗不純物領域と、 前記低濃度領域の外側に設けられた低抵抗不純物領域と を有し、かつ、

前記低抵抗不純物領域はゲイト絶縁膜のない領域に設けられ、かつ、該低抵抗不純物領域はシリサイドにより構成されていることを特徴とする半導体装置。

【請求項5】 請求項4において、シリサイドはチタンまたはニッケルを含むことを特徴とする半導体装置。

【請求項6】 絶得表面上に活性層を、前記活性層上に 第1の絶縁膜を、前記絶縁膜上にゲイト電極材料の被膜 をそれぞれ形成する第1の工程と、

前記ゲイト電極材料上に選択的にマスク膜を設け、該マスク膜を用いて、前記ゲイト電極材料をエッチングし、 ゲイト電極を形成する第2の工程と、

前記ゲイト電極に電解溶液中で電流を印加することによって、主として該ゲイト電極の側面に第1の陽極酸化物層を形成する第3の工程と前記第1の陽極酸化物層をマスクとして、前記第1の絶縁膜をエッチングし、薄くする、もしくは除去することによってゲイト絶縁膜とする第4の工程と、

前記第1の陽極酸化物層を選択的に除去する第5の工程 と.

前記ゲイト電極およびゲイト絶縁膜をマスクとして、前記活性層に選択的にN型もしくはP型の不純物元素を導入する第6の工程とを有することを特徴とする半導体装

置の作製方法。

【請求項7】 絶縁表面上に活性層を、前記活性層上に 第1の絶縁膜を、前記絶縁膜上にゲイト電極材料の被膜 をそれぞれ形成する第1の工程と、

前記ゲイト電極材料上に選択的にマスク膜を設け、該マスク膜を用いて、前記ゲイト電極材料をエッチングし、 ゲイト電極を形成する第2の工程と、

前記ゲイト電極に電解溶液中で電流を印加することによって、主として該ゲイト電極の側面に第1の陽極酸化物層を形成する第3の工程と前記第1の陽極酸化物層をマスクとして、前記第1の絶縁膜をエッチング・除去することによって活性層の表面を露出せしめ、ゲイト絶縁膜とする第4の工程と、

前記第1の陽極酸化物層を選択的に除去する第5の工程 と

全面にシリサイドを形成するための金属被膜を密着させ、活性層と選択的に反応させることによって、活性層中に選択的にシリサイド領域を形成する第6の工程と、 を有することを特徴とする半導体装置の作製方法。

【請求項8】 請求項6または7において、第3の工程と第4の工程の間に、ゲイト電極を陽極酸化することによってバリヤ型の第2の陽極酸化物を形成することを特徴とする半導体装置の作製方法。

【請求項9】 請求項6において、第6の工程の後、レーザーもしくは同等な強光を照射することによって不純物の活性化をおこなうことを特徴とする半導体装置の作製方法。

【請求項10】 請求項7において、第6の工程において、前記活性層と前記金属被膜の反応は、レーザーもしくは同等な強光を照射することによっておこなうことを特徴とする半導体装置の作製方法。

【請求項11】 請求項7において、第6の工程の後、 P型もしくはN型の不純物元素を導入することにより、 高抵抗不純物領域と低抵抗不純物領域とを形成する工程 と、該工程の後、高抵抗不純物領域上のゲイト絶縁膜を 除去する工程とを有することを特徴とする半導体装置の 作製方法。

【請求項12】 請求項6または7において、第1の陽極酸化物層はpH=2を越えない酸性の電解溶液中で電流を印加することによって得られることを特徴とする半導体装置の作製方法。

【請求項13】 請求項8において、バリヤ型の第2の 陽極酸化物層はpH=3以上の電解溶液中で電流を印加 することによって得られることを特徴とする半導体装置 の作製方法。

【発明の詳細な説明】

[0001]

【産業上の利用分野】本発明は、ガラス等の絶縁材料、 あるいは珪素ウェハー上に酸化珪素等の絶縁被膜を形成 した材料等の絶縁表面上に形成される絶縁ゲイト型トラ ・ンジスタ(TFT)およびその作製方法に関する。本発明は、特にガラス転移点(歪み温度、歪み点とも言う)が750℃以下のガラス基板上に形成されるTFTに有効である。本発明による半導体装置は、液晶ディスプレー等のアクティブマトリクスやイメージセンサー等の駆動回路、あるいは3次元集積回路に使用されるものである。

[0002]

【従来の技術】従来より、アクティブマトリクス型の液晶表示装置やイメージセンサー等の駆動の目的で、TFT(薄膜トランジスタ)を形成することが広く知られている。特に、最近は、高速動作の必要から、非晶質珪素を活性層に用いた非晶質珪素TFTにかわって、より高度な特性と高い耐久性が必要とされている。と、半導体集積回路技術で利用されると、半導体集積回路技術で利用されるなは、高抵抗不純物領域(高抵抗ドレイン(HRD)もしくされた。しかしながら、公知の半導体集積回路技術とはれた。しかしながら、公知の半導体集積回路技術とはれた。て、TFTには解決すべき問題が多くあった。特にステングが十分できないため、微細なパターンができないため、微細なパターンができないため、微細なパターンができないため、微細なパターンができないたり大きな制約があった。

【0003】図6には、現在まで用いられているHRDを作製する代表的なプロセスの断面図を示す。まず、基板601上に下地膜602を形成し、活性層を結晶珪素603によって形成する。そして、この活性層上に酸化珪素等の材料によって絶縁被膜604を形成する。(図6(A))

【0004】次に、ゲイト電極605が多結晶珪素(燐等の不純物がンドーピングされている)やタンタル、チタン、アルミニウム等で形成される。さらに、このゲイト電極をマスクとして、イオンドーピング等の手段によって不純物元素(リンやホウ素)を導入し、自己整合的にドーピング量の少ない高抵抗な不純物領域(HRD)606、607が活性層603に形成される。不純物が導入されなかったゲイト電極の下の活性層領域はチャネル形成領域となる。そして、レーザーもしくはフラッシュランプ等の熱源によって、ドーピングされた不純物の活性化がおこなわれる。(図6(B))

【0005】次に、プラズマCVD、APCVD等の手段によって酸化珪素等の絶縁膜608を形成(図6(C))し、これを異方性エッチングすることによって、ゲイト電極の側面に隣接して側壁609を形成する。(図6(D))そして、再び、イオンドーピング等の手段によって不純物元素を導入し、ゲイト電極605 および側壁609をマスクとして自己整合的に十分な高濃度の不純物領域(低抵抗不純物領域、ソース/ドレイン領域)610、611が活性層603に形成される。そして、レーザーもしくはフラッシュランプ等の熱源に

よって、ドーピングされた不純物の活性化がおこなわれる。(図 6 (E))

【0006】最後に、層間絶縁物612を形成し、さらに、層間絶縁物を通して、ソース/ドレイン領域にコンタクトホールを形成し、アルミニウム等の金属材料によって、ソース/ドレインに接続する配線・電極613、614を形成する。(図6(F))

[0007]

【発明が解決しようとする課題】以上の方法は従来の半導体集積回路におけるLDD作製プロセスをそのまま踏襲したものであって、ガラス基板上のTFT作製プロセスにはそのまま適用することの困難な工程や、あるいは生産性の面で好ましくない工程がある。

【0008】第1にはレーザー等の照射による不純物の活性化が2度必要な点である。このため生産性が低下する。従来の半導体集積回路においては不純物元素の活性化は熱アニールによっておこなわれていた。そのため、不純物の活性化は不純物導入が全て終了してからまとめておこなわれた。

【0009】しかしながら、特にガラス基板上のTFTにおいては、基板の温度制約から熱アニールをおこなうことは難しく、いきおい、レーザーアニール、フラッシュランプアニール(RTAあるいはRTP)に頼らざるをえない。しかしながら、これらの手法は被照射面が選択的にアニールされるため、例えば、側壁609の下の部分はアニールされない。したがって、不純物ドーピングの度にアニールが必要となる。

【0010】第2は側壁の形成の困難さである。絶縁膜 608の厚さは $0.5\sim2\mu$ mもある。通常、基板上に 設けられる下地膜 602の厚さは $1000\sim3000$ Å であるので、このエッチング工程において誤って、下地 膜をエッチングしてしまって、基板が露出することが くあり、歩留りが低下した。TFTの作製に用いられる 基板は珪素半導体にとって有害な元素が多く含まれているので、このような不良は極力、避けることが必要しいされた。また、側壁の幅を均一に仕上げることも難しいされた。また、側壁の幅を均一に仕上げることも難しいことであった。これは反応性イオンエッチング (RIE) 等のプラズマドライエッチングの際に、半導体集積 をであった。これは反応性ですることが必要して、基板表面が絶縁性であるためにプラズマの微妙な制御が困難であったからである。

【0011】高抵抗不純物領域のドレインは高抵抗のため、その幅を可能な限り狭くする必要があるが、上記のばらつきによって量産化が困難であり、この自己整合的(すなわち、フォリソグラフィー法を用いることなく位置を決める)プロセスをいかに制御しやすくおこなうかが課題であった。また、従来の方法ではドーピングが最低、2回必要とされたが、このドーピング回数を減らすこともまた、解決すべき課題であった。

【0012】本発明は、上記のような問題を解決し、よ

りプロセスを簡略化して、高抵抗不純物領域を形成する 方法およびそのようにして形成された高抵抗不純物領域 (高抵抗ドレイン、HRD)を有するTFTに関する。 ここで、高抵抗ドレイン(HRD)という言い方をする のは、低不純物濃度にして高抵抗化したドレインに加え て、不純物濃度は比較的高いものの、炭素、酸素、窒素 等を添加して不純物の活性化を妨げて、結果として高抵 抗化したドレインのことも含む。

[0013]

【課題を解決するための手段】高抵抗領域を形成するうえで、本発明ではゲイト電極の陽極酸化等の手段によって形成された酸化物層を積極的に用いることを特徴とする。特に陽極酸化物はその厚さの制御が精密におこなえ、また、その厚さも1000A以下の薄いものから5000A以上の厚いものまで幅広く、しかも均一に形成できるという特徴を有しているため、従来の異方性エッチングによる側壁に代替する材料として好ましい。

【0014】特に、いわゆるバリヤ型の陽極酸化物はフッ酸系のエッチャントでなければエッチングされないのに対し、多孔質型の陽極酸化物は燐酸等のエッチャントによって選択的にエッチングされる。このため、TFTを構成する他の材料、例えば、珪素、酸化珪素には何らダメージ(損傷)を与えることなく、処理することができるのが特徴である。また、バリヤ型、多孔質型ともができるのが特徴である。また、バリヤ型、多孔質型ともにくい。特に、酸化珪素とのエッチングにおいては選択比が十分に大きいことも特徴である。本発明は、以下のような作製工程によってTFT作製することを特徴とし、この工程を採用することによって、より一層、確実にHRDを構成し、また、量産性を向上させることができる。

【0015】図1は本発明の基本的な工程を示してい る。まず、基板101上に下地絶縁膜102を形成し、 さらに活性層103を結晶性半導体(本発明では単結 晶、多結晶、セミアモルファス等、結晶が少しでも混在 している半導体を結晶性半導体という)によって形成す る。そして、これを覆って酸化珪素等の材料によって絶 緑膜104を形成し、さらに陽極酸化可能な材料によっ て被膜を形成する。この被膜の材料としては、陽極酸化 の可能なアルミニウム、タンタル、チタン、珪素等が好 ましい。本発明では、これらの材料を単独で使用した単 層構造のゲイト電極を用いてもよいし、これらを2層以 上重ねた多層構造のゲイト電極としてもよい。例えば、 アルミニウム上に珪化チタンを重ねた2層構造や窒化チ タン上にアルミニウムを重ねた2層構造である。各々の 層の厚さは必要とされる素子特性に応じて実施者が決定 すればよい。

【0016】さらにその被膜を覆って、陽極酸化においてマスクとなる膜を形成し、この両者を同時にパターニング、エッチングして、ゲイト電極105とその上のマ

スク膜106を形成する。このマスク膜の材料としては 通常のフォトリソグラフィー工程で用いられるフォトレジスト、あるいは感光性ポリイミド、もしくは通常のポ リイミドでエッチングの可能なものを使用すればよい。 (図1(A))

【0017】次に、ゲイト電極105に電解溶液中で電流を印加することによってゲイト電極の側面に多孔質の陽極酸化物107を形成する。この陽極酸化工程は、3~20%のクエン酸もしくはショウ酸、燐酸、クロム酸、硫酸等の酸性の水溶液を用いておこなう。溶液の水素イオン濃度pHは2未満であることが望ましい。最適なpHは電解溶液の種類に依存するが、シュウ酸の場合には0.9~1.0である。この場合には、10~30 V程度の低電圧で0.5 μ m以上の厚い陽極酸化物を形成することができる。(図1(B))

【0018】そして、ドライエッチング法、ウェットエ ッチング法等によって絶縁膜104をエッチングする。 このエッチング深さは任意であり、下に存在する活性層 が露出するまでエッチングをおこなっても、その途中で とめてもよい。しかし、量産性・歩留り・均一性の観点 からは、活性層に至るまでエッチングすることが望まし い。この際には陽極酸化物107およびゲイト電極10 5に覆われた領域の下側の絶縁膜(ゲイト絶縁膜)には もとの厚さの絶縁膜が残される。なお、ゲイト電極がア ルミニウム、タンタル、、チタンを主成分とし、一方、 絶縁膜104が酸化珪素を主成分とする場合において、 ドライエッチング法を用いる場合には、フッ素系(例え ばNF3、SF6)のエッチングガスを用いて、ドライ エッチングをおこなえば、酸化珪素である絶縁膜104 は素早くエッチングされるが、酸化アルミニウム、酸化 タンタル、酸化チタンのエッチングレートは十分に小さ いので絶縁膜104を選択的にエッチングできる。

【0019】また、ウェットエッチングにおいては、1 /100フッ酸等のフッ酸系のエッチャントを用いれば よい。この場合にも酸化珪素である絶縁膜104は素早 くエッチングされるが、酸化アルミニウム、酸化タンタ ル、酸化チタンのエッチングレートは十分に小さいので 絶縁膜104を選択的にエッチングできる。(図1

(D))

【0020】その後、陽極酸化物107を除去する。エッチャントとしては、燐酸系の溶液、例えば、燐酸、酢酸、硝酸の混酸等が好ましい。しかし、単に、例えばゲイト電極がアルミニウムの場合には燐酸系のエッチャントを用いると、同時にゲイト電極もエッチングされてしまう。そこで、本発明においては、その前の工程でゲイト電極に3~10%の酒石液、硼酸、硝酸が含まれたエチレングルコール溶液中で、電流を印加することによって、ゲイト電極の側面および上面にバリヤ型の陽極酸化物108を設けておくと良い。この陽極酸化工程においては、電解溶液のpHは2以上、好ましくは3以上、さ

. らに好ましくは6. 9~7. 1とするとよい。このような溶液を得るにはアンモニア等のアルカリ溶液を用いて中和させると良い。得られる陽極酸化物の厚さはゲイト電極105と対向の電極との間に印加される電圧の大きさによって決定される。

【0021】注目すべきは、バリヤ型の陽極酸化が後の工程であるにもかかわらず、多孔質の陽極酸化物の外側にバリヤ型の陽極酸化物ができるのではなく、バリヤ型の陽極酸化物108は多孔質陽極酸化物107とゲイト電極105の間に形成されることである。上記の燐酸系のエッチャントにおいては、多孔質陽極酸化物のエッチングレートはバリヤ型陽極酸化物のエッチングレートの10倍以上である。したがって、バリヤ型の陽極酸化物108は、燐酸系のエッチャントでは実質的にエッチングされないので、内側のゲイト電極を守ることができる。(図1(C)、(E))

【0022】以上の工程によって、ゲイト電極の下側に選択的に絶縁膜104の一部(以下、これをゲイト絶縁膜と称することにする)が残存した構造を得ることができる。そして、このゲイト絶縁膜104、は、もともと多孔質陽極酸化物107の下側に存在していたので、ゲイト電極105、バリヤ型陽極酸化物108からyの距離だけをす、バリヤ型陽極酸化物108からyの距離だけ離れた位置にまで存在し、その幅yは自己整合的に決定されることが特徴である。換言すれば、活性層103におけるゲイト電極下のチャネル形成領域の外側にはゲイト絶縁膜104、の存在する領域と、存在しない領域とが自己整合的に形成されるのである。

【0023】この構造で加速したN型もしくはP型の不 純物のイオンを活性層に注入すると、絶縁膜104が存 在しない(もしくは薄い)領域には多くのイオンが注入 され、(相対的に)高濃度の不純物領域(低抵抗不純物 領域) 110、113が形成される。一方、ゲイト絶縁 膜104)が存在する領域では、このゲイト絶縁膜中に イオンが注入され、それを透過したイオンのみが半導体 に注入されるため、そのイオン注入量は相対的に減少し て、低濃度の不純物領域(髙抵抗不純物領域) 111、 112が形成される。低濃度の不純物領域1111、11 2と髙濃度の不純物領域110、113との不純物濃度 の違いは、絶縁膜104の厚さ等によって異なるが、通 常、0.5~3桁、前者の方が小さい。また、ゲイト電 極の下の領域には実質的には不純物が注入されず、真性 または実質的に真性な状態が保たれ、すなわちチャネル 形成領域となる。不純物注入後にはレーザーもしくはそ れと同等な強光を照射することによって不純物の活性化 をおこなえばよいが、この工程は、いうまでもなく実質 的に1回で十分である。(図1(E))

[0024]

【作用】このように、本発明では高抵抗不純物領域の幅 を陽極酸化物107の厚さyによって自己整合的に制御 することに特徴がある。そして、さらにゲイト絶縁膜104'の端部109と高抵抗領域(HRD)112の端部117を概略一致させることができる。図6に示した従来の方法ではこのような役割を果たす側壁の幅の制御は極めて困難であったが、本発明においては、陽極酸化物107の幅は、陽極酸化電流(電荷量)によって決定されるため、極めて微妙な制御が可能である。

【0025】さらに、上記の工程からも明らかなように、不純物ドーピングの工程が実質的に1回であっても、低抵抗領域、高抵抗領域を形成でき、さらに、その後の活性化の工程も1回の処理で済む。このように本発明では、ドーピング、活性化の工程を減らすことには抵抗が大きいため、電極とオーム接触させることが難したが難したが、この抵抗のためドレイン電圧の低下の氏をすことが問題となっていた。しかし、他方、HRDはたまり、ホットキャリヤの発生を抑止でき、高い信頼性を得ることができるというメリットも併せ持ってった。本発明はこの矛盾する課題を一挙に解決し、自己を合的に形成される0.1~1 μ m幅のHRDと、ゾできる、ドレイン電極に対してオーム接触を得ることができる。

【0026】また、本発明においては図1の陽極酸化物108の厚さを適切に利用することによって、ゲイト電極の端部と不純物領域の位置関係を任意に変更できる。この例を図4に示す。例えば、イオンドーピング法(プラズマドーピングともいう)のようにイオンが実質的に質量分離されないまま注入される方法では、イオンの進入角度がまちまちであるので、不純物の横方向への広がりもかなりあり、すなわち、イオンの進入付加さ程度の横方向への広がりが見込まれる。以下の例では活性層404の厚さを800Aとする。

【0027】したがって、図4(A)に示すように、金属のゲイト電極401の外側に陽極酸化物402(図1、108に対応)の厚さ(例えば800A)が活性層404と同程度の厚さであれば、ほとんどゲイト電極401の端部405と高抵抗不純物領域407の端部406が重なりもせず、離れもしない一致状態となる。図4(B)のように陽極酸化物402の厚さが、例えば300Aと活性層の厚さ800Aより大きな場合には、ゲイト電極の端部405と高抵抗不純物領域の端部406が離れたオフセット状態となる。逆に図4(C)のように陽極酸化物402の厚さが小さくなれば、ゲイト電極201の厚さが小さくなれば、ゲイト電極401の周囲に陽極酸化物が存在しない状態で最大となる。

【0028】一般にオフセット状態では、逆方向リーク 電流が低下し、オン/オフ比が向上するという特徴を有 し、例えば、アクティブマトリクス液晶ディスプレーの 画素の制御に用いられるTFT (画素TFT) のように、リーク電流の少ないことが必要とされる用途に適している。しかしながら、HRDの端部で発生したホットキャリヤが陽極酸化物にトラップされることによって、 劣化するという欠点も合わせ持つ。

【0029】オーバーラップ状態のものでは上記のようなホットキャリヤのトラップによる劣化は減少し、また、オン電流が増加するが、リーク電流が増加するという欠点がある。このため、大きな電流駆動能力の要求される用途、例えば、モノリシック型アクティブマトリクスの周辺回路にもちいられるTFT(ドライバーTFT)に適している。実際に使用するTFTを図4(A)~(D)のいずれのものとするかは、TFTの用途によって決定されればよい。

[0030]

【実施例】

「実施例1〕 図1に本実施例を示す。まず、基板(コーニング7059、300mm×400mmもしくは100mm×100mm)101上に下地酸化膜102として厚さ1000~3000Aの酸化珪素膜を形成した。この酸化膜の形成方法としては、酸素雰囲気中でのスパッタ法を使用した。しかし、より量産性を高めるには、TEOSをプラズマCVD法で分解・堆積した膜を用いてもよい。

【0031】その後、プラズマCVD法やLPCVD法によって非晶質珪素膜を300~5000Å、好ましくは500~1000Å堆積し、これを、550~600℃の還元雰囲気に24時間放置して、結晶化せしめた。この工程は、レーザー照射によっておこなってもよい。そして、このようにして結晶化させた珪素膜をパターニングして島状領域103を形成した。さらに、この上にスパッタ法によって厚さ700~1500Åの酸化珪素膜104を形成した。

【0032】その後、厚さ1000A~3 μ mのアルミニウム(1 μ t%のSi、もしくは0.1~0.3 μ t%のSc(スカンジウム)を含む)膜を電子ピーム蒸着法もしくはスパッタ法によって形成した。そして、フォトレジスト(例えば、東京応化製、OFPR800 μ 5ストの形成前に、陽極酸化法によって厚さ100~100Aの酸化アルミニウム膜を表面に形成しており、後、フォトレジストとの密着性が良く、また、フォトレジストとの密着性が良く、また、フォトレジストとの密着性が良く、また、フォトレジストからの電流のリークを抑制することにより、後の形成するうえで有効であった。その後、フォトレジへトとアルミニウム膜をパターニングして、アルミニウム膜と一緒にエッチングし、ゲイト電極105マスク膜106とした。(図1(A))

【0033】さらにこれに電解液中で電流を通じて陽極酸化し、厚さ3000~6000A、例えば、厚さ50

0.0 Aの陽極酸化物 1.0.7 を形成した。陽極酸化は、 $3\sim2.0$ %のクエン酸もしくはショウ酸、燐酸、クロム酸、硫酸等の酸性水溶液を用いておこない、 $1.0\sim3.0$ Vの一定電流をゲイト電極に印加すればよい。本実施例では $pH=0.9\sim1.0$ のシュウ酸溶液(3.0 で電圧を 1.0 Vとし、 $2.0\sim4.0$ 分、陽極酸化した。陽極酸化物の厚さは陽極酸化時間によって制御した。(図 1.(B))

【0034】次に、マスクを除去し、再び電解溶液中に おいて、ゲイト電極に電流を印加した。今回は、3~1 0%の酒石液、硼酸、硝酸が含まれたpH=6.9~ 7. 1のエチレングルコールアンモニア溶液を用いた。 溶液の温度は10℃前後の室温より低い方が良好な酸化 膜が得られた。このため、ゲイト電極の上面および側面 にバリヤ型の陽極酸化物108が形成された。陽極酸化 物108の厚さは印加電圧に比例し、印加電圧が150 Vで2000Aの陽極酸化物が形成された。陽極酸化物 108の厚さは図4に示されるような必要とされるオフ セット、オーバーラップの大きさによって決定したが、 3000A以上の厚さの陽極酸化物を得るには250V 以上の高電圧が必要であり、TFTの特性に悪影響を及 ぼすので3000A以下の厚さとすることが好ましい。 本実施例では80~150Vまで上昇させ、必要とする 陽極酸化膜108の厚さによって電圧を選択した。(図 1 (C))

【0035】その後、ドライエッチング法によって酸化 珪素膜 104をエッチングした。このエッチングにおいては、等方性エッチングのプラズマモードでも、あるいは異方性エッチングの反応性イオンエッチングモードでもよい。ただし、珪素と酸化珪素の選択比を十分に大きくすることによって、活性層を深くエッチングしないようにすることが重要である。例えば、エッチングガスとして CF_4 を使用すれば陽極酸化物はエッチングされず、酸化珪素膜 104のみがエッチングされる。また、多孔質陽極酸化物 107の下の酸化珪素膜 1040はエッチングされずに残った。(図1(D))

【0036】その後、燐酸、酢酸、硝酸の混酸を用いて陽極酸化物107をエッチングした。このエッチングでは陽極酸化物107のみがエッチングされ、エッチングレートは約600名/分であった。その下のゲイト絶縁膜104、はそのまま残存した。そして、イオンドーピング法によって、TFTの活性層103に、ゲイト電極部(すなわちゲイト電極とその周囲の陽極酸化膜)およびゲイト絶縁膜をマスクとして自己整合的に不純物を注入し、低抵抗不純物領域(ソース/ドレイン領域)110、113、高抵抗不純物領域111、112を形成した。ドーピングガスとしてはフォスフィン(PH_3)をドーピングガスとしてはフォスフィン(PH_3)を用いたため、N型の不純物領域となった。P型の不純物領域を形成するにはジボラン(B_2H_6)をドーピングガスとして用いればよい。ドーズ量は $5 \times 10^{14} \times 5 \times 10^{14}$

 $10^{15}\,\mathrm{cm^{-2}}$ 、加速エネルギーは $10\sim30\,\mathrm{keV}$ とした。その後、KrFエキシマーレーザー(波長 $248\,\mathrm{nm}$ 、パルス幅 $20\,\mathrm{nsec}$)を照射して、活性層中に導入された不純物イオンの活性化をおこなった。

【0037】 SIMS(二次イオン質量分析法)の結果によると、領域110、113の不純物濃度は 1×10 20~ 2×10^{21} c m⁻³、領域111、112 では 1×10^{17} ~ 2×10^{18} c m⁻³であった。ドーズ量換算では、前者は 5×10^{14} ~ 5×10^{15} c m⁻²、後者は 2×10^{13} ~ 5×10^{14} c m⁻²であった。この違いはゲイト絶縁膜104 の有無によってもたらされたのであって、一般的には、低抵抗不順部鵜領域の不純物濃度は、高抵抗不純物領域のものより0.5~3桁大きくなる。(図1(E))

【0038】最後に、全面に層間絶縁物114として、CVD法によって酸化珪素膜を厚さ3000A形成した。TFTのソース/ドレインにコンタクトホールを形成し、アルミニウム配線・電極115、116を形成した。さらに200~400℃で水素アニールをおこなった。以上によって、TFTが完成された。(図1(F))

【0039】図1に示した手法を用いて、1枚の基板上に複数のTFTを形成した例を図5(A)に示す。この例ではTFTはTFT1~3の3つを形成した。TFT1および2はドライバーTFTとして用いられるもので、図1の陽極酸化物108に相当する酸化物501、502の厚さを200~1000A、例えば500Aの薄いものとし、若干、ゲイト電極と高抵抗領域(HRD)がオーバーラップとなるようにした。図では、TFT1のドレインとTFT2のソースとを互いに接続し、また、TFT1のソースを接地し、TFT2のドレインを電源に接続して、CMOSインバータとなるように構成した例を示す。周辺回路としては、この他にもさまでまな回路があるが、それぞれの仕様にしたがって、このようなCMOS型の回路とすればよい。

【0040】一方、TFT3は画素TFTとして用いられるものであり、陽極酸化物503を2000Aと厚くして、オフセット状態(図4(B)に対応)とし、リーク電流を抑制した。TFT3のソース/ドレイン電極の一方はITOの画素電極501に接続されている。このように陽極酸化物の厚さを変えるには、それぞれのTFTのゲイト電極の電圧を独立に制御できるように分離しておけばよい。なお、TFT1およびTFT3はNチャネル型TFT、TFT2はPチャネル型TFTである。【0041】〔実施例2〕 図2に本実施例を示す。まず、絶縁表面を有する基板(例えばコーニング7059)201上に実施例1の(A)、(B)の工程を用いて、下地酸化膜202、島状性珪素半導体領域(例えば

結晶性珪素半導体)203、酸化珪素膜204、アルミ

ニウム膜(厚さ200 nm~1μm)によるゲイト電極

205とゲイト電極の側面に多孔質の陽極酸化物(厚さ 3000Å~1 μ m、例えば5000Å)206を形成した。(図2(A))

そして、実施例1と同様にバリヤ型の厚さ1000~2 500Aの陽極酸化物207を形成した。(図2

【0042】さらに、多孔質陽極酸化物206をマスクとして、酸化珪素膜204をエッチングし、ゲイト絶縁膜204、を形成した。その後、パリヤ型陽極酸化膜207をマスクとして、多孔質陽極酸化膜206をエッチング除去した。その後、ゲイト電極部(205、207)およびゲイト絶縁膜204、をマスクとしてイオンドーピング法によって不純物注入をおこない、低抵抗不純物領域208、211、高抵抗不純物領域209、210を形成した。ドーズ量は $1\sim5\times10^{14}\,\mathrm{cm}^{-2}$ 、加速電圧は30 \sim 90kVとした。不純物としては燐を用いた。(図2(C)

【0043】さらに、全面に適当な金属、例えば、チタン、ニッケル、モリブテン、タングステン、白金、パラジウム等の被膜、例えば、厚さ50~500Aのチタン膜212をスパッタ法によって全面に形成した。この結果、金属膜(ここではチタン膜)212は低抵抗不純物領域208、211に密着して形成された。(図2(D))

【0044】そして、KrFTキシマーレーザー(波長 248nm、パルス幅 20nsec)を照射して、ドーピングされた不純物の活性化とともに、金属膜(ここではチタン)と活性層の珪素を反応させ、金属珪化物(ここでは珪化チタン)の領域 213、214を形成した。レーザーのエネルギー密度は $200\sim400m$ J/cm 2、好ましくは $250\sim300m$ J/cm 2 が適当であった。また、レーザー照射時には基板を $200\sim500$ ℃に加熱しておくと、チタン膜の剥離を抑制することはできた。

【0045】なお、本実施例では上記の如く、エキシマーレーザーを用いたが、他のレーザーを用いてもよいことはいうまでもない。ただし、レーザーを用いるにあたってはパルス状のレーザーが好ましい。連続発振レーザーでは照射時間が長いので、熱によって被照射物が熱によって膨張することによって剥離するような危険がある。

【0046】パルスレーザーに関しては、Nd:YAGレーザー(Qスイッチパルス発振が望ましい)のごとき赤外光レーザーやその第2高調波のごとき可視光、KrF、XeCl、ArF等のエキシマーを使用する各種紫外光レーザーが使用できるが、金属膜の上面からレーザー照射をおこなう場合には金属膜に反射されないような波長のレーザーを選択する必要がある。もっとも、金属膜が極めて薄い場合にはほとんど問題がない。また、レーザー光は、基板側から照射してもよい。この場合には

. 下に存在するシリコン半導体膜を透過するレーザー光を 選択する必要がある。

【0047】また、アニールは、可視光線もしくは近赤外光の照射によるランプアニールによるものでもよい。ランプアニールを行う場合には、被照射面表面が600~1000℃程度になるように、600℃の場合は数分間、1000℃の場合は数10秒間のランプ照射を行うようにする。近赤外線(例えば1.2 μmの赤外線)によるアニールは、近赤外線が珪素半導体に選択的に吸収され、ガラス基板をそれ程加熱せず、しかも一回の照射時間を短くすることで、ガラス基板に対する加熱を抑えることができ、極めて有用である。

【0048】この後、過酸化水素とアンモニアと水とを5:2:2で混合したエッチング液でTi膜のエッチングした。露出した活性層と接触した部分以外のチタン膜(例えば、ゲイト絶縁膜204や陽極酸化膜207上に存在したチタン膜)はそのまま金属状態で残っているが、このエッチングで除去できる。一方、金属珪化物である珪化チタン213、214はエッチングされないので、残存させることができる。(図2(E))

[0049] 最後に、図2(F)に示すように、全面に 層間絶縁物217として、CVD法によって酸化珪素膜 を厚さ2000Å~1μm、例えば、3000Å形成 し、TFTのソース/ドレインにコンタクトホールを形 成し、アルミニウム配線・電極218、219を200 0A~1μm、例えば5000Aの厚さに形成した。本 実施例においてはアルミニウム配線がコンタクトする部 分は珪化チタンであり、アルミニウムとの界面の安定性 が珪素の場合よりも良好であるので、信頼性の高いコン タクトが得られた。また、このアルミニウム電極21 8、219と珪化物領域213、214の間にパリヤメ タルとして、例えば窒化チタンを形成するとより一層、 信頼性を向上させることができる。本実施例では、珪化 物領域のシート抵抗は10~50Ω/□となった。一 方、高抵抗不純物領域209、210では10~100 $k\Omega/\square$ となり、この結果、周波数特性が良く、かつ、 高いドレイン電圧でもホットキャリヤ劣化の少ないTF Tを作製することができた。

【0050】本実施例では、低抵抗不純物領域211と金属珪化物領域とを概略一致させるこができた。特にゲイト絶縁膜204、の端部215と高抵抗不純物領域210と低抵抗不純物領域211の境界216を概略一致せしめ、同時にこの端部215と金属珪化物領域214の端部とを概略一致せしめた結果、図4(A)~(D)における低抵抗不純物領域を金属珪化物領域として置き換えればよいことは明らかであろう。

【0051】図2に示した手法を用いて、1枚の基板上に複数のTFTを形成した例を図5(B)に示す。この例ではTFTはTFT1~3の3つを形成した。TFT1および2はドライバーTFTとしてCMOS化した構

成、ここではインバータ構成として用いたもので、図2の陽極酸化物207に相当する酸化物505、506の厚さを200~1000Å、例えば500Åの薄いものとし、若干、オーバーラップとなるようにした。一方、TFT3は画素TFTとして用いられるものであり、陽極酸化物503を2000Åと厚くして、オフセット状態とし、リーク電流を抑制した。TFT3のソース/ドレイン電極の一方はIT〇の画素電極502に接続されている。このように陽極酸化物の厚さを変えるには、それぞれのTFTのゲイト電極の電圧を独立に制御できるように分離しておけばよい。なお、TFT1およびTFT3はNチャネル型TFTである。

【0052】本実施例ではイオンドーピングの工程の後にチタン膜成膜の工程を配したが、この順番を逆にしてもよい。この場合には、イオン照射の際にチタン膜が全面を被覆しているので、絶縁基板で問題となった異状帯電(チャージアップ)防止の上で効果が大である。また、イオンドーピング後にレーザー等によってアニールしてから、チタン膜を形成して、レーザー等の照射、あるいは熱アニールによって、珪化チタンを形成してもよい。

【0053】 (実施例3〕 図3に本実施例を示す。まず、基板 (コーニング7059) 301上に実施例1の (A)、(B)の工程を用いて、下地酸化膜302、島状結晶性半導体領域、例えば珪素半導体領域 303、酸化珪素膜 304、アルミニウム膜(厚さ2000A~1μm)によるゲイト電極 305とゲイト電極の側面に多孔質の陽極酸化物(厚さ600A)306を形成した。(図3(A))そして、実施例1と同様にバリヤ型の厚さ1000~2500Aの陽極酸化物 307を形成した。(図3(B))

【0054】さらに、多孔質陽極酸化物306をマスク として、酸化珪素膜304をエッチングし、ゲイト絶縁 膜304'を形成した。その後、多孔質陽極酸化物30 6を選択的にエッチングして、ゲイト絶縁膜304'の 一部を露出せしめた。その後、全面に適当な金属、例え ば、厚さ50~500Aのチタン膜308をスパッタ法 によって全面に形成した。(図3(C))そして、Kr Fエキシマーレーザー(波長248nm、パルス幅20 nsec)を照射して、チタンと活性層の珪素を反応さ せ、珪化チタン領域309、310を形成した。レーザ ーのエネルギー密度は200~400mJ/cm 2 、好 ましくは $250\sim300$ mJ/c m² が適当であった。 また、レーザー照射時には基板を200~500℃に加 熱しておくと、チタン膜の剥離を抑制することはでき た。この工程は、可視光線もしくは近赤外光の照射によ るランプアニールによるものでもよい。

【0055】この後、過酸化水素とアンモニアと水とを5:2:2で混合したエッチング液でTi膜のエッチン

・グした。露出した活性層と接触した部分以外のチタン膜 (例えば、ゲイト絶縁膜304)や陽極酸化膜307上 に存在したチタン膜) はそのまま金属状態で残っている が、このエッチングで除去できる。一方、珪化チタン3 09、310はエッチングされないので、残存させるこ とができる。(図3(D))

【0056】その後、ゲイト電極部およびゲイト絶縁膜304をマスクとしてイオンドーピング法によって不純物注入をおこない、低抵抗不純物領域(=珪化チタン領域)311、314、高抵抗不純物領域312、313を形成した。ドーズ量は $1\sim5\times10^{14}\,\mathrm{cm}^{-2}$ 、加速電圧は $30\sim90\,\mathrm{k}$ Vとした。不純物としては燐を用いた。(図3(E))

【0057】そして、再びKrFエキシマーレーザー (波長248 nm、パルス幅20 nsec) を照射して、ドーピングされた不純物の活性化をおこなった。この工程は、可視光線もしくは近赤外光の照射によるランプアニールによるものでもよい。最後に、ゲイト電極部(305、307)をマスクとしてゲイト絶縁膜304'をエッチングした。これはゲイト絶縁膜304'にドーピングされた不純物による不安定性を避けるためにおこなった。その結果、ゲイト電極部の下部にのみゲイト絶縁膜304"が残存した。

【0058】そして、図3(F)に示すように、全面に 層間絶縁物315として、CVD法によって酸化珪素膜 を厚さ6000A形成し、TFTのソース/ドレインに コンタクトホールを形成し、アルミニウム配線・電極3 16、317を形成した。以上の工程によって、TFT が完成された。

[0059]

【発明の効果】本発明によって、実質的に1回のドーピングおよび1回のレーザーアニール、RTA等の活性化工程によって、高抵抗不純物領域(HRD)を形成することができた。この工程の短縮化は量産性を高め、TFT製造ラインへの投資額を減額するうえで有効である。また、本発明ではHRDの幅が極めて精度良く形成されるので、歩留り、均一性の優れたTFTが得られる。

【0060】なお、本発明においてはより特性を向上させるためには、より多くのドーピングやレーザーアニール、RTAをおこなってもよく、必ずしもドーピングの回数やレーザーアニール、RTAの回数を1回に限定するものではない。本発明のTFTは、半導体集積回路が形成された基板上に3次元集積回路を形成する場合で

も、ガラスまたは有機樹脂等の上に形成される場合でも 同様に形成されることはいうまでもないが、いずれの場 合にも絶縁表面上に形成されることを特徴とする。特に 周辺回路を同一基板上に有するモノリシック型アクティ ブマトリクス回路等の電気光学装置に対する本発明の効 果は著しい。

【0061】また、本発明において、PまたはN型の不純物のイオン注入またはイオンドープに加えて、炭素、酸素、窒素を同時に添加してもよい。かくすると、逆方向リーク電流が低減し、また、耐圧も向上する。例えばアクティブマトリクス回路の画素TFTとして用いる場合に有効である。この場合には、図5のTFT3の陽極酸化物層の厚さをTFT1、TFT2と同じ厚さとできる。

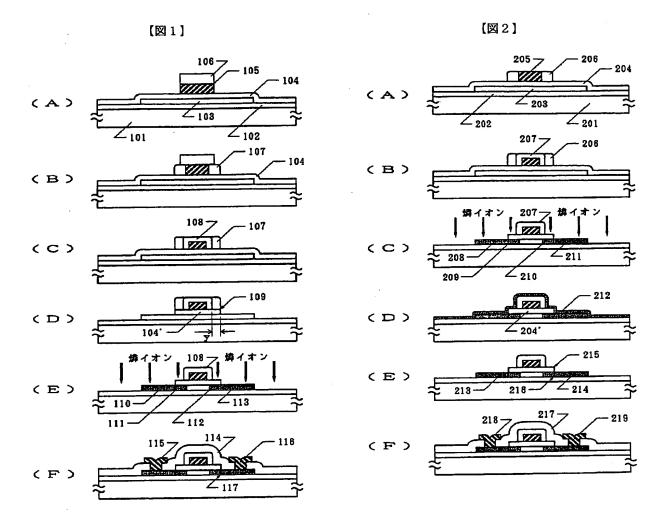
【図面の簡単な説明】

の境界

- 【図1】 実施例1によるTFTの作製方法を示す。
- 【図2】 実施例2によるTFTの作製方法を示す。
- 【図3】 実施例3によるTFTの作製方法を示す。
- 【図4】 本発明におけるオフセット、オーバーラップの関係について示す。
- 【図5】 実施例1および2によって得られたTFTの集積回路の例を示す。

[図6] 従来法によるTFTの作製方法を示す。 【符号の説明】

F12 2 1		
101		絶縁基板
102		下地酸化膜(酸化珪素)
103		活性層(結晶珪素)
104		絶緑膜(酸化珪素)
104'		ゲイト絶縁膜
105		ゲイト電極(アルミニウム)
106		マスク膜(フォトレジスト)
107		陽極酸化物(多孔質酸化アルミニウ
ム)		
108		陽極酸化物(バリヤ型酸化アルミニウ
ム)		·
109		ゲイト絶縁膜の端部
110.	1 1 3	低抵抗不純物領域
111,	1 1 2	髙抵抗不純物領域(HRD)
114		層間絶縁膜(酸化珪素)
115.	1 1 6	金属配線・電極(アルミニウム)
117		低抵抗不純物領域と高抵抗不純物領域

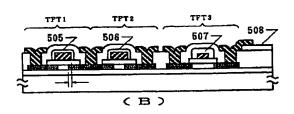


(10)

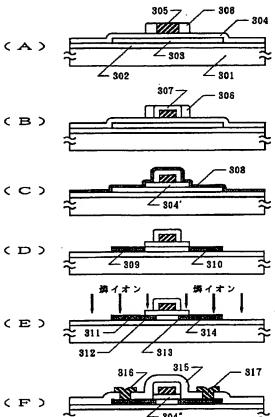
[M 5]

TPT1 TPT2 TPT3

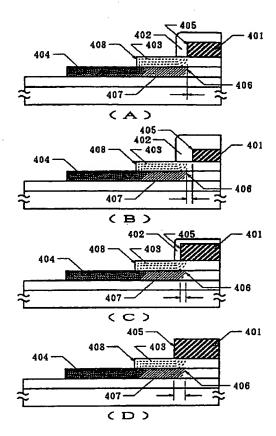
501 7 502 7 503 7 504 7



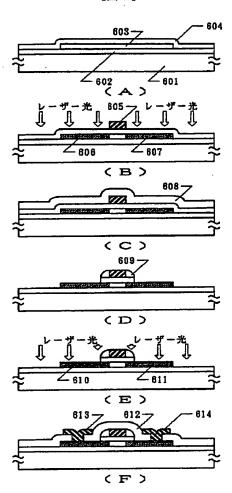
[図3]



[図4]







フロントページの続き

(51) Int. Cl. 6

識別記号

庁内整理番号 9056-4M

FI H01L 29/78

3 1 1 G

技術表示箇所

(72)発明者 大沼 英人

神奈川県厚木市長谷398番地 株式会社半

導体エネルギー研究所内

(72)発明者 山口 直明

神奈川県厚木市長谷398番地 株式会社半

導体エネルギー研究所内

(72)発明者 須沢 秀臣

神奈川県厚木市長谷398番地 株式会社半

導体エネルギー研究所内

(72)発明者 魚地 秀貴

神奈川県厚木市長谷398番地 株式会社半

導体エネルギー研究所内

(72)発明者 竹村 保彦

神奈川県厚木市長谷398番地 株式会社半

導体エネルギー研究所内